

大賞

私からのおくりもの

第二峡田小学校 六年 葛西 光榮

こんにちは。

突然ですが、柳田先生にとってわすれられないおくりものは何ですか。

私には、祖母とのわすれられない思い出がたくさんあります。その思い出をくれた祖母がお盆に私の家へ里帰りをしました。

悲しかったあの日から一年半が過ぎ、アナグマの死を知ってふさぎこんでいたモグラと自分の姿が重なり、「わすれられないおくりもの」という絵本を思い出しました。アナグマが死んでしまい、悲しんでいる友達がアナグマの残した知恵と工夫を使い、助け合って大切な思い出を

胸に生きていくお話です。

この本を読み返し、祖母が私に残してくれたおくりものについて考えました。

一つは、私を本好きにしてくれたことです。祖母はたくさんの本を読み聞かせてくれました。その頃は、どんな絵がかいてあるのかどんな話を聞けるのかを楽しみに本を読んでもらっていました。文字が読めるようになり、今では文庫本や長い小説も読むようになりました。文章からたくさんのことを想像し、学ぶことが楽しくてしかたがないのです。

もう一つは、将来の夢を持たせてくれたことです。「家族と一緒にいたい。」と自宅で闘病し、日々弱々しくなっていく祖母に私は背中をさすることしかできずにいました。祖母と同じように病気に苦しむ人達を少しでも楽にできる医師になりたいと思うようになりました。亡くな

る寸前の祖母に誓った夢をかなえるために本を読んで知識を得たり、たくさん勉強したりとがんばっていききたいです。

そして、私にわすれられないおくりものをしてくれた祖母に何かお返しができるのだろうかと考えました。祖母の病気の苦しみをやわらげることがはできなかったけれど、これからもずっと、心の中で祖母を思い続け、祖母からのわすれられないおくりものを大切にしていきたいです。

【柳田邦男さんからのメッセージ】

誰でも、だいたいな家族の誰かが亡くなったら、涙がとまらないほど悲しくなりますね。

葛西さんは、好きだった祖母が長い闘病の末に亡くなった後、心の中にただただ悲しい気持ちをかかえて、ふさぎこむ自分の心

を整理できないでいたのでしょうか。

でも、一年半たって、低学年のころに読んだ絵本『わすれられないおくりもの』を思い出したという。どうぶつのむらで、みんなから慕われていた長老のアナグマさんが亡くなった後、みんな悲しく寂しい思いに打ちひしがれるけれど、春が来て集まると、モグラくんはアナグマさんからハサミの使い方を教えてもらい、紙切り細工が上手にできるようになったと話するなど、それぞれにアナグマさんから教わったことを話すうちに、アナグマさんがみんなの心の中で生きていると思えてきて、明かるい気持ちになれたという物語ですね。

葛西さんは、モグラくんに自分の姿を重ね合わせ、祖母が自分の心に残してくれたおくりものは何だろうかと考えたというのですね。すると、おくりものは二つあったことに気付いたという。

一つは、幼いころから、たくさん本を読んでくれたこと。そのおかげで、自分は本好きになり、今では文庫本や長い小説も読む

ようになっていいます。

もう一つは、自宅で療養していた祖母に対し、背中をさすことしかできなかったことから、病気で苦しむ人達を少しでも楽にしてあげられる医師になろうと決心したことですね。

そして、これからは、心の中で祖母を思い続け、祖母からの「おくりもの」にお返しする意味もこめて、しっかりと本を読んで知識を身につけ、勉強していきたいと思っていますというのです。

人は誰でも長い人生を歩んでいく中で、悲しいことやつらいことに向き合わなければならぬことが少なくありません。そんなときに、心を支えてくれたり癒してくれたたりするのは、家族の絆であったり、友達の友情であったり、いろいろです。そんなとき、幼い頃から毎日のように絵本や物語を親に読んでもらい、小学生になってからは、どんどん自分で本を読むようになった人は、何か悲しみやつらさに直面したときに、ふと幼いころに心に刻まれた一冊の本の登場人物(時には動物)の言葉や生き方が記憶の中か

ら甦ってきて、それが気持ちを前向きに立て直す力になることがよくあります。

本を読み、感動を胸に刻むということは、そのとき楽しかったとか感動したというだけで終わるのではなく、ずっと年月がたつてから、思いがけなく一冊の本の内容や言葉が甦ってきて、心や生き方の支えになるという秘められた可能性をもたらすものなのです。

葛西さんの手紙は、そんな読書の深い意義を、しっかりと語っていると言えます。すばらしい手紙に拍手を贈ります。